

ニューヨークにおけるセントラル・パークの
成立とその歴史的展開に関する研究

東京大学農学部大学院

正会員 石川 幹子

A Historical Study on the Establishment and Development
of the Central Park in New York City
by
MIKIKO ISHIKAWA

Abstract

The Central Park in New York City is the first municipal urban park in U.S.A., established in 1858. The purpose of this paper is to clarify the role and influence of the Central Park from the point of view of the historical development of landscape architecture in U.S.A.

The following four points have analysed in this paper. First; the establishment of the Central Park caused a nation-wide municipal urban park movement and many big parks and park systems were created as infrastructure of the city planning. Second; the planning concept of the Central Park was to create a wide pastoral scenery, within highly developed urban environment, for the park was regarded as lungs of city and also it had a great contribution to citizen's recreation and welfare. Third; To accomplish the above ideal, the technique of civil engineering took a great role, especially on the thorough drainage system, and the separate road system. Fourth; New professional, "Landscape Architecture" was created from the construction of the Central Park.

〔キーワード：計画史、造園史、セントラルパーク〕

1. はじめに

本研究はニューヨークのセントラル・パークについて、その造園史上の意義を明らかにするという観点から、成立の経緯、計画内容、建設過程についての歴史をまとめたものである。

セントラル・パークは、マンハッタン島の中央部に位置する大規模公園である（面積840エーカー、約340ha）。アメリカの大都市の都心部には、19世紀後半に建設された大規模公園が各地に存在するが、セントラル・パークは、こうした大規模公園の第一号である。セントラル・パーク建設以前のアメリカの諸都市には、共有の牧草地としての起源を有するコモン（Common）、都市の広場であるスクエア（Square）、民間の遊園地（Pleasure Garden）、公園墓地（Rural Cemetery）といったオープン・スペースは存在したが、都市基盤施設として整備された公共の公園（Public Park）は、セントラル・パーク

が最初であった。この意味で、セントラル・パークの建設は一時期を画したものであった。

アメリカの近代造園史を概観した上で、筆者は、セントラル・パークの計画史上の意義を次の四点と考える。

(1) 近代都市計画の中における公共の公園の創設

欧州及び日本の諸都市では、都心部の大規模公園は王侯貴族の狩猟地、庭園、及び神社仏閣の境内地等、封建時代のストックが転化されて生み出された。こうした歴史的資産の存在しないアメリカで、公園用地はどのようにして生み出され、かつどのような社会的背景がそれを可能にしたのだろうか。

(2) 新しい公園思想の誕生と一時代を画する公園デザイン展開

セントラル・パークは、都市化が進んでいたマンハッタン島の中央部に位置するが、面積的に大規模であり、かつ豊かな水と緑、広々とした芝生地を有

する“田園型”(Pastoral)とよばれる様式上の特色を有する。このような公園思想の背景及びそれを支えた新しい公園のデザインとはどのようなものだったのだろうか。

(3) 新しい公園デザインを支えた土木工学的技術の展開

セントラル・パークの原地形は、露出した岩盤や湿地帯が分布し、公園の建設には多大な困難を伴った。実際の建設過程で、どのような土木工学の技術が展開され、不毛の地を緑の公園へと転化させたのだろうか。

(4) 新しい職能としての“ランドスケープ・アーキテクチュア(Landscape Architecture)”の誕生
セントラル・パークの建設は、それまでのランドスケープ・ガーデニング(Landscape Gardening)の対象とした庭園の建設とは大きく異なり、都市計画、土木工学、建築計画、行政との連携に基づく多様な専門領域を総合化する公共事業であった。こうした中で、新しい職能としてのランドスケープ・アーキテクチュア(日本では、大正期に“造園”として訳され今日に到る)は、どのような経緯で誕生し、発展していったのだろうか。

本研究は、これらの点について具体的に示すことを目的とする。本論にはいる前にこれまでのセントラル・パークに関する諸研究をまとめると、次の通りとなる。①公園建設に係る時系列的研究で、記録性の高いもの。¹⁾②社会思想史の観点からの研究で、主として設計者であるフレデリック・ロー・オルムステッド(Frederick Law Olmsted)の環境計画の理念に関するもの。²⁾③セントラル・パークの今日的評価に関する研究で、再整備という観点からの実務レベルに焦点が当てられているもの。³⁾④セントラル・パーク内の建築、橋、植物等、構成要素に着目したもの。⁴⁾

日本における研究は、時系列的研究としては、建設の背景と初期を対象としたもの。⁵⁾及びフレデリック・ロー・オルムステッドに関するもの。⁶⁾がある。しかしながら、上述したような観点に基づき、計画思想、計画内容、技術論に係る全体像をアメリカ近代造園史の位置づけにより研究したものはなく、本研究の独自性は、この点にある。

2. 歴史的背景

(1) ニューヨークにおける公園設置に到る経緯

ニューヨークにおける公園設置運動は、18世紀後半におこった。1785年8月15日、ニューヨーク・パケット(New York Packet)という新聞は、市長あてに市民の健康と楽しみのための空間の必要性をとき、世論を喚起する手段として公開競技設計の提案を行った。当時ニューヨークには、公園(Public Park)と呼ばれるものではなく、わずかに共有のオープン・スペース(コモン)として使われていたフィールズ(the Fields, 現在のシティーホール公園)、マンハッタン南端の要塞跡地であるバッテリー(the Battery, 現在のバッテリー公園)、ワシントン広場等の都市内の広場(Squares)等、数ヘクタールの小規模なものが存在するにすぎなかった。⁷⁾

マンハッタンに現在のグリッド・システムの街路計画を導入した最初の計画は、1811年のニューヨーク市道路委員会(the Commissioners of Streets and Roads)のプランであり、都市のオープンスペースとしては7カ所の広場と1カ所のパレード・グラウンド(練兵場・祝祭・行事等に利用される)の計画が含まれていた。これらのオープン・スペースの合計は450 エーカー(約182ha)であったが、急速な都市化が進展する中で、計画案は次第に縮小され、1838年には当初の約1/4の120エーカー(約48ha)となった。

この当時、アメリカ東部の大都市では、公園墓地運動が一世を風靡していた。それは、都心における深刻な墓地不足の解消、環境衛生の改善を目的とし、郊外に新しい田園風の墓地を建設する動きであった。公園墓地は、イギリス自然風景式庭園の中で育まれた絵画風(the picturesque)という様式美に基づき整備された。豊かな水と緑、ゆるやかに波打つ芝生地に象徴される美しい絵画的景観特性を有する公園墓地は、多くの都市住民の散策、レクリエーションの場として利用されるようになった。ニューヨーク郊外では、マンハッタン島に隣接するブルックリン(現在はニューヨーク市となっている)に、1838年グリーン・ウッド公園墓地が開設された。

こうした中で、新しい運動が、ウィリアム・カレン・ブライアント(William C. Bryant)等、当時のニューヨークの論壇の中核を担う知識人グループに

よっておこってきた。⁸⁾ 1844年6月3日ブライアントはニューヨーク・イブニング・ポスト (New York Evening Post) に「新しい公園」 (A New Park) と題するキャンペーンをはじめた。彼らは、ニューヨークは、単に経済の中心地のみならず、新しい文化の中心でなければならないとし、ヨーロッパ諸国の公園に比肩することのできる美しい公園が必要であると考えていた。⁹⁾ こうした公園はレクリエーションの場であると同時に、あらゆる階層の人々が共に集い様々な文化に接することのできる場、すなわち平等という民主主義の理想を実現する場と考えられていた。¹⁰⁾ そして、具体的な候補地として、イーストリバー沿いのジョーンズの森 (Jones' Wood) をあげた。

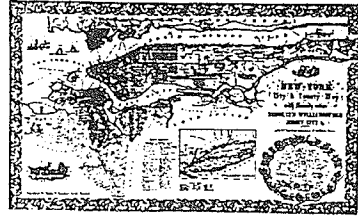
(2) ニューヨークの公園計画の具体化の動き

ブライアントらの理念を具体的形に現し、望ましい公園像を提案した人物が、当時、造園家としてめざましい活躍をしていたアンドリュー・ジャクソン・ドウニング (Andrew J. Downing, 1815~1852) であった。ドウニングは、1815年10月、ハドソン川沿いのニューバーグの町で生まれ、苗木商としての訓練を受けた。彼は次第に造園と建築に対する関心をいだくようになり、26才で「ランドスケープ・ガーデニングの理論と実際」 (A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening) という本を著した。彼は絵画風 (the picturesque) の手法に基づき、主としてハドソン川沿いの郊外住宅地の造園を数多く手がけていた。ドウニングは、こうした実績をふまえて、新しい公園のイメージと具体的な位置について、1850年、雑誌「園芸家」 (Horticulturist) に次のような提案を行った。

「39番街からハーレム川の間、500 エーカー (約200ha) の用地を確保することが望ましい。この地域は地形の変化に富んでおり、かつ、緑の野原や自然のかぐわしい香りを思う存分感じることのできるゆとりのある広さと美しさを有する公園としての可能性を有している。」¹¹⁾

ドウニングの指摘した地域が、現在のセントラル・パークの位置にほぼ相当する。1854年のニューヨーク地勢図 (図-1) 及び (図-2) をみると、この地域はまだ郊外であり、住宅がまばらに建っているにすぎず、起伏に富んだ地形の中に樹林が点在し

図-1 ニューヨーク市 (1854年)



41丁目周辺までが市街地で、それより北部はまだ郊外であり、旧クロトン貯水池が描かれている。

図-2 現在のセントラル・パーク周辺の概況



図面中央が、セントラル・パーク計画地。(中央に矩形の旧クロトン貯水池がある。出所: Charles Capen McLaughlin, Frederick Law Olmsted Vol. III, The Johns Hopkins Univ. Press, 1983, P374)

ており、矩形のクロトン貯水池が設置されていたことがわかる。

こうした大規模な田園景観の創造が、新しい公園の理想像として世論の支持を受けたのは、前述した公園墓地運動が背景にあったからであり、アメリカにおける近代公園の様式としての源流は、ここからはじまったことがわかる。

(3) 州公園法の成立とセントラル・パークの位置の確定

1851年4月、ニューヨーク市長キングスランド (Kingsland) は、市議会に「すべての人々が楽しむことのできる市の誇りとなる公園を設置すべきである」という提案を行った。これを受けて、土地委員会 (the Committee on Lands and Places) は、イースト・リバー沿いのジョーンズの森を公園候補地として推薦した。(ジョーンズの森は1844年以来、ブライアントらにより提案されてきた場所であった。) 1851年7月、ニューヨーク州議会は、公園 (Public Park) 取得に関する最初の公園法を可決した。¹²⁾ この公園法は①公園用地の買収権、②公園建設のための組織化を市に許可したものであり、公園の位置については3番街とイースト・リバー間及び64丁目と75丁目に囲まれたジョーンズの森と決定された。しかしながら、ジョーンズの森候補地は、①面積が154 エーカー (約62ha) で狭かったこと、②位置的

に中央ではなく、イースト・リバー側であるため利用者の利便性上の問題があったこと、③当時のニューヨーク経済は舟運により支えられていたため、商業的利用に供されることのない公園が川沿いを占拠することに根強い反対があったこと——等により、ジョーンズの森の他に1853年7月、現在のセントラル・パークを公園予定地とすることが決定された。大規模の公園を二カ所建設することについては、上述した理由に加え財政上からも強い反対があり、1854年4月、ジョーンズの森案は結局、廃案となった。こうして、現在のセントラル・パークの位置は確定したが、美しいウォーターフロントに臨む大規模公園建設の機会を失ったことは、ニューヨークにとって大きな損失であった。

セントラル・パークの位置は、5番街と8番街（現在のセントラル・パーク・ウエスト通り）の間、59丁目と106丁目との間と決定されたが、後に地形的一体性を考慮し、その境界は110丁目まで延長された（1859年）。この結果、セントラル・パークの総面積は840エーカー（約340ha）となった。

公園用地の買収価格の公正化を図るため、1853年11月、ニューヨーク州最高裁判所(the Supreme Court)は5人のメンバーより構成される予算評価委員(Commissioners of Estimate and Assessment)の任命を行った。

1856年にかけて予算評価委員は用地買収費算定の任にあたった。1856年2月、州最高裁判所は、予算評価委員会の報告を受理し、用地買収費として総額、5,069,693ドルが約7,500にのぼる多数の土地所有者に支払われることとなった。これに対応するために、ニューヨーク市は年率5%の“セントラル・パーク債”の発行を行い、用地の買収を行った。¹³⁾

公園建設のための組織化については、1856年5月市議会は、セントラル・パークの建設に係る臨時の委員会を、市長と街路委員会のメンバーを構成員として設置し、エグバート・ヴィール(Egbert L. Vial)を技師長(Chief Engineer)に任命した。ヴィールは1853年より、公園予定地の測量を行い、独自に計画案の策定を行い、この案は、1856年6月に上記の委員会により採択された(図-4参照)。

3. セントラル・パーク競技設計と

当選案の計画内容

(1)競技設計にいたる経緯

公園用地の買収が進むにしたがって、公園建設のための組織を正式に発足させることとなり、1857年4月、州政府は11名の委員の指名を行った。(An Act for the Regulation and Government of the Central Park in the City of New York)。新しい委員会は、公園の建設、計画内容の策定に関する全責任を有し、ヴィールを技師長として、引き続き任命した。1857年10月、同委員会はヴィールの指導下で、主として労務管理や保安にあたる監督官(Superintendent)の募集を行った。この監督官として選ばれたのが、フレデリック・ロー・オルムステッドであった。¹⁴⁾ 同時に、委員会は公開競技設計を行う決定を下し、以下の設計条件に基づき公募を行った。①建設費は約1,500,000ドル、②東西方向の横断道路の設置(4本以上)、③パレード・グラウンドと遊び場の設置、④将来の展示や音楽会のための敷地の確保、⑤噴水、展望塔の敷地の確保、⑥花壇用地の確保、⑦スケード場の確保。

ちなみに、賞金は1位(2,000ドル)、2位(1,000ドル)、3位(750ドル)、4位(500ドル)であり、オルムステッドの監督官としての年俸が1,500ドルと決定されたことと比較しても、高額の賞金であったといえる。

オルムステッドは、カルバート・ヴォー(Calvert Vaux)の熱心な推めにより、競技設計に参加する決意を固めた。ヴォーはイギリス生まれの建築家であり、前述のドウニングと共に仕事をしていたが、1852年にドウニングがハドソン川で船火事による不慮の死をとげた後、その仕事を継承していた。競技設計には33案の応募があり、審査委員会は、1858年4月、オルムステッドとヴォーによる第33番目の案である“緑の芝原”(Greensward)を一位と決定した。ちなみに二位はセントラル・パークの植栽の監督官であったサミュエル・ガスティン(Samuel I. Gustin)、三位はオルムステッドの部下であったミラーとマッキントッシュ(Messrs. Miller, McIntosh)、四位は建築家ハワード・ダニエルズ(Howard Daniels)であった(図-5参照)。

この決定は、セントラル・パークの建設のみなら

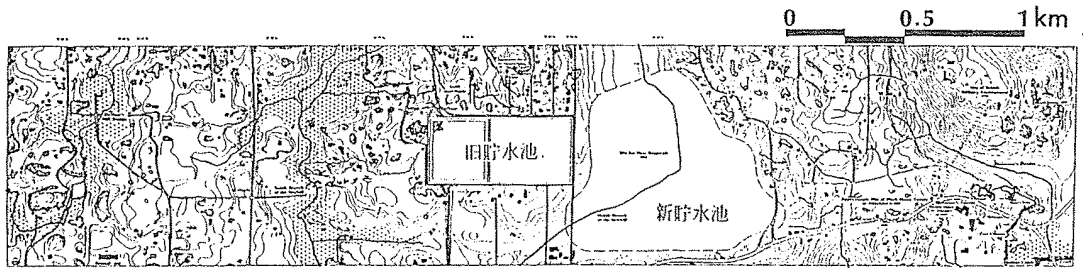


図-3 セントラル・パーク原地形 (1857年)

出所: Elizabeth Barlow, Frederick Law Olmsted's New York, New York, 1972, P90

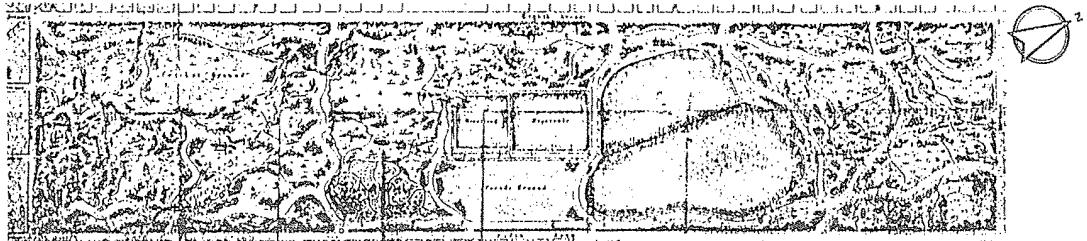


図-4 エグバート・ヴィールの計画案 (1857年)

出所: Frederick Law Olmsted, Jr. and Theodora Kimball, Forty Years of Landscape Architecture: Central Park, The MIT Press 1973, P557

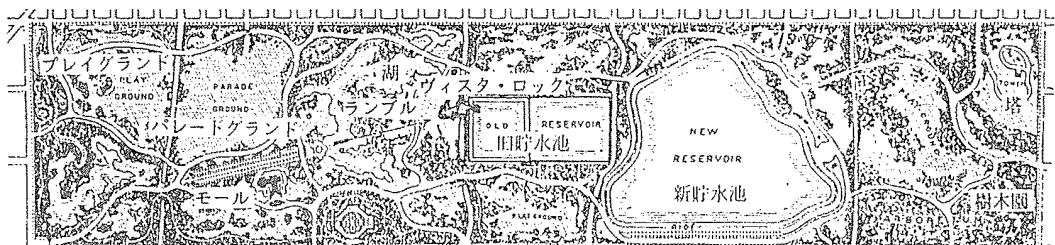


図-5 セントラル・パーク競技設計当選案 緑の芝原 (Greensward) (1858年)

出所: Charles Capen McLaughlin, op. cit. P118

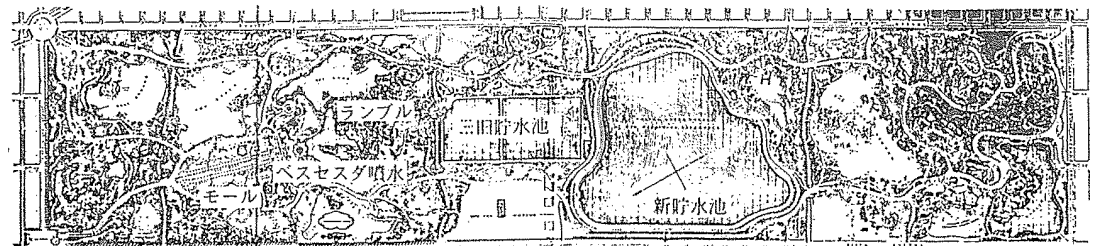


図-6 セントラル・パーク (1873年)

出所: Elizabeth Barlow Rogers, Frederick Law Olmsted's New York, New York, 1972, P90

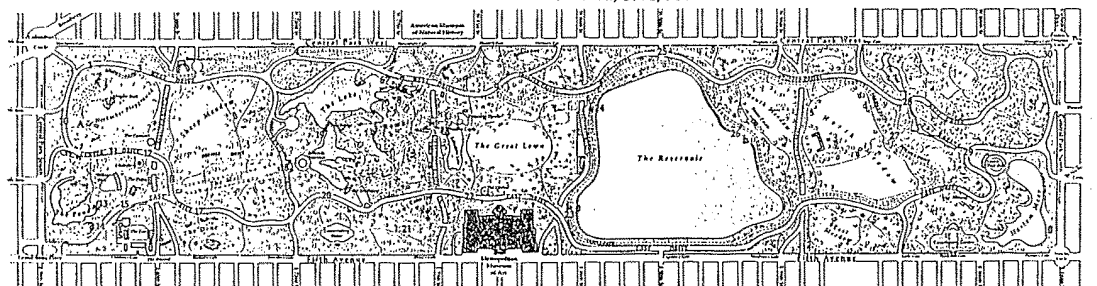


図-7 セントラル・パーク (1984年)

出所: Henry Hope Reed, Bridges of Central Park, Greensward Foundation, Inc., 1990

ず、アメリカ近代造園史上に新しい一步を踏み出すこととなった。

(2) 当選案の特色

オルムステッドとヴォーによって著された「セントラル・パーク改良計画のための説明書——緑の芝原」(Description of a plan for the Improvement of the Central Park, "GREENSWARD", 1858)の中から当選案の特色をまとめると次の通りとなる。¹⁵⁾

① 地形条件からみた全体構成

公園の中央に新・旧の貯水池があり、公園は二つの区域に分けられる。北部は、起伏のある広い傾斜地が広がっており、公園として理想的条件を備えている。南部はこれとは対照的に地形的に多様性に富んでおり、特に貯水池に隣接するランブル(Ramble)地域が優れた自然景観を有しており、それぞれの地区に対応した土地利用を行う必要がある。

② 交通

市内の交通を円滑にするため、4本の横断道路を設ける。この横断道路は、公園面より一段低い位置にあり、公園内園路での立体交差により利用者の障害とならないようにする。

③ 公園の境界の修景計画

公園の境界には植樹帯を設け、市街地の喧噪から公園の雰囲気を守る。また、連続した樹木のラインにより、公園空間に広がりを与える。

④ 施設配置計画

公園の二つの基本的構造、すなわち田園風ランドスケープと横断道路が決定された後、それぞれの敷地の特性に応じて、競技設計の前提条件である諸施設(遊び場、コンサートホール、噴水、展望台)等を導入する。これらは、全体の田園景観との調和を第一義的に考えるものとする。例外は、プロムナードと花壇であり、プロムナードは唯一の直線の軸として、公園のシンボルとして位置づける。

(3) 審査委員会による当選理由の説明

1858年5月、競技設計検討委員会より、「緑の芝生」案の検討報告書が提出された。¹⁶⁾ この報告書によれば、当選案の決定にあたっては、次の二つの観点から検討が行われた。第一は、早急に決定しなければならない公園の基本的構造に関してであり、第二は計画案の有する自然環境の特質についてであ

った。

まず、第一点について報告書は、造成及び排水等の土木工学的処理及び立体交差による交通体系の提言をあげ、当選案が満足すべきものであると述べている。第二点については、プロムナードの形態、芝生の分布、そして森と湖の配置は、建設に至る長い議論を具体化したものであり、ニューヨーク市民の必要とする自然の姿にふさわしいものであると述べている。

こうして、オルムステッドは、ヴィールにかわって1858年5月、セントラル・パーク技師長(Architect in Chief of the Central Park)に任命され、公園建設の最高責任者として本格的に建設事業に取り組むこととなった。

4. 建設のプロセスとその後のセントラル・パーク

1858年、6月、オルムステッドは技師長として組織の再編を行い、次の人々を助手として任命した。建築担当としてヴォー、排水担当としてジョージ・ワーニング(George Warning)、道路担当としてウィリアム・グラント(William Grant)、植栽担当としてイグナッツ・ピラート(Ignatz Pilat)らであった。公園の建設が如何に急速に進展したかについては、1858年の年次報告書に、8月から12月までの5カ月間に次の工事が行われたと記されている。¹⁷⁾

①公園南部の排水工事の完了、②周辺地域及び新貯水池周辺までの車道の造成、③数マイルの歩道の舗装工事の完了、④3つのアーチ橋の完成、⑤モールの植栽工事の完了、⑥公園南部の植栽工事の進展。そして12月には一部完成した池に水を引込み、多くの市民がスケートを楽しんだと記されている。それから約3年後の1862年1月付のセントラル・パークの建設の進捗状況を示した図面によると¹⁸⁾、この時点で貯水池より南部の地域はベスセスグ・テラス及びボート・ハウスの地区を除き、工事がほぼ完了していたことがわかる。また北部の地域については、車道(Drives)のみが完成しており、86丁目及び97丁目に予定されている横断道路もまだ完成されていなかった。建設工事がほぼ完了するのは1873年であり、同年の図面(図-6参照)をみると、59丁目か

ら 110 丁目までのほぼ全域が完成し、特に南部地区では噴水、モニュメント、橋などの施設が加わり、植栽の密度も一段と充実したことを読みとることができる。この間、オルムステッドのセントラル・パークにおける地位は様々に変遷した。それは公園の建設が政争の具として使われることが、しばしば起こったためで、オルムステッドは 1863 年に辞任、1865 年に再任、1870 年辞任、1871 年再任、1873 年辞任という経過をたどり、1878 年以降はついにボストンへ活動の拠点を移した。この間、セントラル・パーク建設の実権を握ったのはトウィード・リング (Tweed Ring) であり、ノース・メドウ (North Meadow) への動物園の建設計画等、施設導入に重点をおいた改変案が出された。オルムステッドは、一貫してこうした改変と戦い、これをしりぞけた。1878 年より現在にいたるまでのセントラル・パークの歴史を簡単に振り返ってみると、次の通りとなる。

(1) 1885～1915 年 : 園芸家であったサミュエル・パーソンズ (Samuel Parsons) がオルムステッドらの後をついだ。植栽の充実、施設の維持が良好に行われ、市民のレクリエーション活動の場として活況を呈した。しかしながら 1893 年のシカゴ博の影響による都市美化運動 (City Beautiful Movement) が一世を風靡し、セントラル・パークにも、装飾的門を設置しようとする新古典派の攻勢があった。オルムステッドは、彼の晩年であったが、全力を投入し、この攻勢よりセントラル・パークを守った。

(2) 1915～1930 年 : スポーツ・レクリエーションが全盛をふるった時代である。セントラル・パークの芝生地は野球、テニス、クロケット、バスケットボール等に利用され、湖はカヌー、水泳、スケート等に利用された。

(3) 1934～1960 年 : ニューヨーク市全域を統括する最初の公園局長としてロバート・モーゼス (Robert Moses) が公園の管理にあたった時代である。公園の機能別にみた施設化が進み、当初の田園型の景観構成が次第に失われていった。

(4) 1960 年以降 : セントラル・パークの歴史的価値を再発掘し、人々のつどいの場として再整備しようとする市民運動が広がった。オルムステッドとヴォーの原案の調査研究に基づき、現在、西暦 2000 年を目標とする総額 150,000,000 ドルにのぼる再整備計画が進められている。¹⁹⁾

5. アメリカ近代造園史におけるセントラル・パークの意義

本章では、この研究の目的であるアメリカ近代造園史におけるセントラル・パークの意義について①都市計画、②道路計画、③土木工学、④公園計画とデザイン、⑤新しい職業領域の確立という五つの観点から、筆者の考えを述べるものとする。

(1) 都市計画上の意義

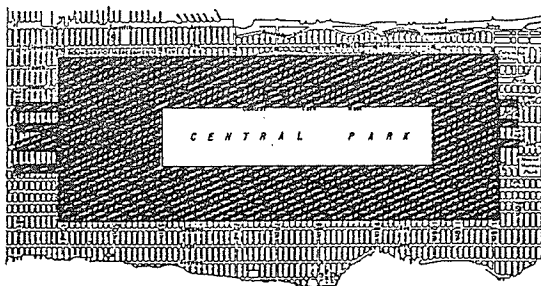
セントラル・パークのアメリカ近代都市計画における意義は、都市基盤施設の一つとしての公園緑地計画が最初に実施された点にある。公園の建設を実現に導いた原動力は、約一世紀にわたり繰り返し展開された論壇を舞台とするニューヨークの市民運動であった。公園の候補地は当時のニューヨークの急速な都市化を反映し、当時としてはまだ郊外であった現在の位置に決定されたが、ノースパーク (North Park) ではなく、あえて、セントラルという名称を公園に付したのは、遅からず、マンハッタン全体が市街化されるであろうという将来の都市形態を想定した計画であったことは、注目に値する。セントラル・パークの建設の影響を受け成立した、アメリカ諸都市における都心の大規模公園には次のようなものがある。フィラデルフィアのフェアマウント公園 (1865 年)、ブルックリンのプロスペクト公園 (1866 年)、ゴールデンゲート公園 (1870 年)、セントルイスのフォレスト公園 (1876 年)、ボストンのフランクリン公園 (1886 年) 等。

また、それまで都市のオープン・スペースは、共有地 (コモン)、広場 (スクエア)、庭園、遊園地等、都市の装飾、記念碑、資産者の住宅のアメニティのため等、限られた目的に供されるものであったが、都市の肺臓となる大規模なオープン・スペースが誕生したことは、公園緑地計画が都市計画の一環として位置づけられたという点で、その後の都市計画の発展に大きな影響を与えた。すなわち、アメリカにおける公園緑地計画は、その後、複数の公園を公園道路 (Parkway) によって結び、都市におけるオープン・スペースのネットワーク化を図る動きへと発展し、更には大都市圏公園緑地系統という地域計画へと発展した。こうした経緯の中から、1900 年に、ハーバード大学デザイン学部にアメリカで最初のランドスケープ・アーキテクチャ学科が設立さ

れた。都市計画学は、ランドスケープ・アーキテクチャ学科の一つの議義として、1909年、ジェームス・プレイ（James Sturgis Pray）により始められた。そして、1929年に正式に都市計画学科としてヘンリー・ヒュバート（Henry V. Hubbard）により確立された。セントラル・パークの建設はこうした一連の歴史的発展の重要な出発点として位置づけられる。

セントラル・パークの近代都市計画上の意義において、次に重要な点は、公園用地の取得と建設に係る手法である。セントラル・パークの建設は、ニューヨーク州議会がニューヨーク市に関わる公園法を施行した時点から、具体化された。この公園法は、二つの内容を有する。第一点は公園用地取得のための財源確保を市当局に許可したこと。第二点は公園建設に必要な組織（管理者、測量士、土木技術者、庭師、労働者の雇用）を設置することを許可したことである。公園用地の買収価格の公正化を図るためには、ニューヨーク州最高裁判所が予算評価委員の任命を行い、その査定による土地価格を基準として用地買収が行われた。ニューヨーク市は、その財源確保の手段として「セントラル・パーク債」の発行を行った。また、同時に受益者負担の制度を導入し、公園建設に伴う受益地の設定を行い、土地収用経費500万ドルの32%を図に示す受益地に賦課した。

図-8 セントラル・パークの受益地



出所

Harold Maclean Lewis, 都市計画研究会訳、最新都市計画（上巻）コロナ社、1949年 本資料の出所については、越沢明氏の御教示によった。斜線部分が受益地である。

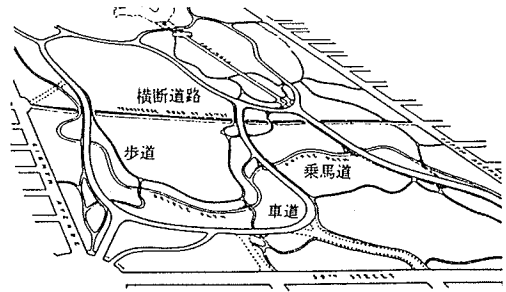
こうした法的措置に基づく財源確保の手法は、ブルックリン、カンザス・シティ、デンバー等、多くの都市の公園緑地系統を創設していく上で、先例として活用された。

(2)道路計画上の意義

セントラル・パーク建設用地は、マンハッタンの格子型道路網の中央部に、南北に約2.5マイル（約4km）、東西に約0.5マイル（約0.8km）の距離を有する長方形の地域であったため、公園が都市内交通の障害とならないよう、競技設計の条件の一つとして4本以上の横断道路（Transverse Road）の設置が義務づけられた。競技設計で審議に付された33案のうち、立体交差の手法を導入した案は、オルムステッドとヴォーによる緑の芝生案のみであったため、この点が高く評価され、当選の理由の一つとなったことは前述の通りである。

オルムステッドとヴォーにより提案され、かつ実施に移されたセントラル・パークの道路計画の特色は、堀割による横断道路の他に、車道（Drives）、乗馬道（Bridal Trail）、歩道（Foot Path）の利用形態の異なる4つの道路系統により構成されていた点にある。しかも、これらの4系統の道路網は、随所に立体交差の手法を導入することにより、快適な公園の利用という本来の目的を利用者が享受することができるよう慎重に配慮されていた。すなわち、交通システムを系統別に分離し、かつ立体交差という三次元的配置により独立した機能を維持させるという歴史上はじめての試みは、その後、アメリカの都市計画及び道路計画に多大な影響を与えていくこととなった。²⁰⁾

図-9 セントラル・パーク道路計画図



出所：Frederick Law Olmsted, Jr. and Theodora Kimbal, Forty years of Landscape Architecture: Central Park, The MIT Press, 1973, P379

オルムステッドは、このような道路計画のアイデアを、どのような先例から取得したのであろうか。公園計画の中で歩道と車道を分離し設計された先行事例としては、イギリスの造園家ジョセフ・パクストン（Joseph Paxton）が1844年に設計をしたリヴァプールのバーケンヘッド公園がある。この公園は外周を取り囲む車道と、地形に沿った不規則な歩道の二系統の道路網を有するが立体交差は導入されていない。オルムステッドは、1850年、バーケンヘッド公園を訪れており、市民のための新しい公園の姿に心を動かされると共に、車道と歩道が分離されて計画されていることに言及している。²¹⁾ 立体交差については、ロンドンのリージェント・パークの動物園の事例がある。²²⁾

こうした様々の事例とセントラル・パークの地形の検討をふまえて、立体交差を有する交通システムは実施に移されたが、注目すべきは、オルムステッドは繰り返し、道路によって公園が分断されてはならないこと、景観的にもかつ利用上からも、それは連続したものとして設計されなければならないと強調している点である。後年、オルムステッドは多くの公園道路をつくったが、その範としたものはブルパールであったと述べており、その萌芽がセントラル・パークの道路計画であったと考える。

(3)土木工学上の意義

①排水計画

セントラル・パークの敷地は、前述したように、市街化には困難の伴う露出した岩盤と、湿地の分布する立地特性を有していた（図-3参照）。

こうしたマイナスの要因を、逆に現況を生かした特異性のある計画へと転化させた背景には、オルムステッドの農業土木の技術が基礎となったという点が筆者の見解である。

道路計画と並び排水計画は、セントラル・パーク建設における重要な課題であった。セントラル・パーク建設以前の計画地は、イースト・リバーへと連なる5つの排水域により構成されていた。しかし市街化が進むにつれ、周辺地域の造成が行われた結果、排水計画は抜本的見直しをせまられていた。かつ計画地は露出した岩盤の他に大量の岩が埋もれており、雨水の排水不良が各所にみられた。このような状況

に対し、オルムステッドは、暗渠排水方式(Thorough drainage system)導入の提案を行った。²³⁾

暗渠排水は、イギリスの王立農業協会(the Royal Agricultural Society)の技術者であったジョサイア・パークス(Josiah Parkes 1793-1871)によって、考案された排水システムであり、地下に土管もしくは木製の管を埋設することにより、排水不良地の改善をうながす技術であり、主として農地の改良に利用されていた。オルムステッドは、かつてステータン島(現在は、ニューヨーク市に含まれる)で実験農場を営んでいた時代に暗渠排水について学び、1850年に英国製の土管製造機を購入した。それは、アメリカに輸入された機械の最初のものの一つであった。こうした経験をふまえて、オルムステッドは、土木技術者ジョージ・ワーニング(George E. Waring, Jr)と共に、図-10に示す排水計画の敷設を行った。このシステムは、約40フィート(約12m)間隔で、地表面から約3mの位置に土管を敷設したものであり、土管は主として、地下に埋もれている基盤岩の周辺、不透水層の土壌を有する地域及び地下水位が高い所等に重点的に設置された。

また、公園の道路計画と平行して、横断道路、車道、乗馬道、歩道に沿って表面排水のシステムが導入された。湖岸の造成にあたっては、湖への土砂流入を防ぐため表面排水を集め、土砂を沈殿させ、濾過する施設がつくられた(図-12)。図-12において夏期の高水位に対応する護岸と、冬期の低水位に対応する二段の護岸が建設されたことは、寒冷地における護岸の保全のみならず、当時、盛んであった冬期のスケート利用者の利便性を考慮したいわゆる親水護岸であり、細心の配慮がすみずみにまで払われていたことがわかる。

暗渠排水に代表される農業土木技術の公園計画への適要は、その後、多くの地域で適用され、公園施工上の重要な技術として今日に到っている。また、オルムステッドと共に排水計画にあたったワーニングは、同様に農業土木の出身者であったがその後、都市衛生設備工学のパイオニアとなり、1882年には「分流式排水システム」を著し、メンフィス、ワシントン、フィラデルフィア、ニューヨーク市等の排水計画の策定を行った。²⁴⁾

図-10 セントラル・パーク排水計画図

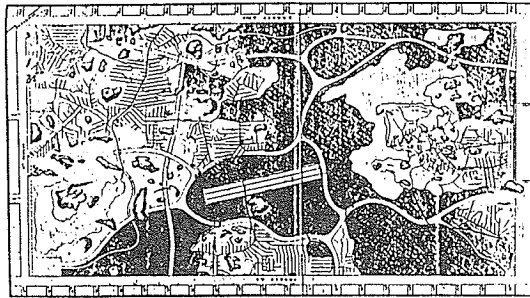


図-11 歩道の排水断面図

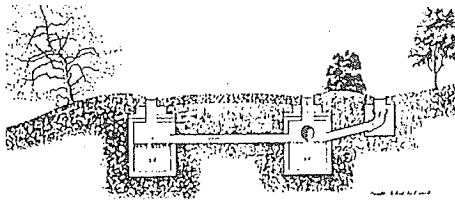
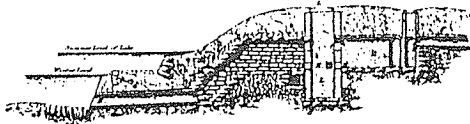


図-12 湖岸に設置された雨水排水の沈澱室と濾過室



出所：図10の出所はCharles Capen McLaughlin, op. cit. P99。
図11、12の出所は、Elizabeth Darlow, op. cit. P81。

②橋の景観設計

セントラル・パーク建設の土木工学上の意義について述べる時、橋の景観設計は重要な要素の一つと言える。立体交差による道路計画により、セントラルパークには、多くの橋が建設された。1859年から1875年にかけて建設された橋は39橋にのぼる。しかも、興味深いことは、橋のデザインが一つ一つ異なり、ゴシックからロマネスクまで多様性に富んでいることであった。その多くは、石によるアーチ橋であるが、5つの橋は当時、産業技術の新しい時代のシンボルであった鉄を素材とする橋であった。現在、セントラル・パークを代表する橋として有名である弧状の曲線を有するBow-Bridgeも、鋳鉄製である。

これらの大小の橋は、田園型とよばれる自然環境に調和しているだけではなく、広大なセントラル・パークの敷地の中で、それぞれの場所の個性ある美的景観を形づくる上で重要な役割を果たしている。

総じて、セントラル・パーク建設にあたって適用された土木工学上の技術の成果は、排水計画にみられるきめの細かさ、橋のデザインにみられる優美さ等、公園の美的環境を醸成する上でのインフラとしての役割をはたしたといえる。

(4)公園計画とデザイン上の意義

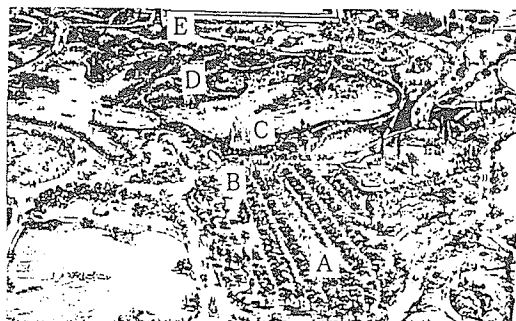
セントラル・パークの計画は、都市の中に広大な田園景観を再現させることを基本理念とした。そのために、①なだらかに波打つ広々とした牧野をイメージさせる森、湖、芝生地配置、②外周林による周囲の都市環境からの隔絶、③建築物、噴水、橋等の自然景観との調和を前提とする配置等を公園計画の基本とした。こうした計画内容は、“田園型”と呼ばれ、その後のアメリカにおける近代公園計画上のプロトタイプとなった。

オルムステッドとヴォーによる公園計画の中でこうした田園型の全体構成と並び、きわだった特色を有するものが、唯一の直線の軸として計画されたモール（the Mall）であった。彼らは貯水池の南部にあるヴィスタ・ロック（Vista Rock）及びその周辺のランブルとよばれる樹林地を計画地の中で、最もすぐれた景観的特質を有する地域とみなしていた。そして、セントラル・パークへの主要な入口となる5番街と59丁目のコーナーから、公園の心臓部であるランブルへと、人々を招き入れるために、公園全体のシンボルとなるモールを導入したのである。このモールは、全長約400m、4列のアメリカ楡により構成されており、軸線はヴィスタ・ロックを焦点とし、正確に南北の方位に従い配置された。しかしながら、このモールの特色は二重の焦点（ヴィスタ・ロックとベスセスタ噴水）を有し、しかも立体交差という三次元的空間配置を活用することにより、景観上の演出に周到なデザイン上の配慮が行われていた点にある。

すなわち、モール（図-13、A参照）の終点は、車道（Drives）となっており（図-13、B参照）、散策者がアンダーパスによるトンネルをくぐりぬげると、ベスセスタ噴水が近景として現れ（図-13、C参照）、その背後には、ランブルの深い森と湖（図-13、D参照）、ヴィスタロックが遠景として展開される（図-13、E参照）という空間構成となっていた。人工と自然、明と暗という異なる空間要

素を交錯させることにより形づくられたベスセダ・テラスは、セントラル・パークにおける人々の集いの場として活況を呈した。そして、田園型景観の中に、人々の集う核となる空間を適確に配置したことが、セントラル・パークを市民にとって身近なものとし、一世紀以上に渡り広くニューヨーク市民の支持を受けることとなった大きな要因であると、筆者は考える。

図-13 セントラル・パーク モール周辺(1863年)



出所: Cythia Zaitzevsky, Frederick Law Olmsted and the Boston Park System, The Belknap press of Harvard University Press, 1982, p24

(5)新しい職業領域の確立

セントラル・パーク建設の仕事は、造成、排水、道路、橋、護岸等の土木工事、建築、園路、広場、植栽等異なる専門領域を総合化するものであり、しかも建設機械の充分に発達していなかった当時において、工事はその大部分を人力に頼っており、多数の労働者の管理が特に困難を極めた。1858年10月における労働者の数は一日平均 2,500人であり、1859年のピーク時には 3,666人を数えた日もあった。さらに、工事の進展に伴い部分的に開園する場所ができると、利用者の啓蒙という新しい問題が生じた。こうした仕事の内容は、従来の土木、ランドスケープ・ガーデナーもしくは建築家の仕事の領域をはるかにうわまわっており、新しい職業の概念の模索がはじまった。

“ランドスケープ・アーキテクチャ”(以下L.A.と略す)という言葉が初めて公式に使われたのは、1863年5月12日付の書簡の中であった。しかしながら、皮肉にもそれは政治的抗争のため、オルムステッドとヴォーが公園委員会に辞任の意思を伝える手紙であった。これにより先、1863年1月付の年

次報告の図面にもL.A.のサインがみられる。しかし、この時期はオルムステッドはワシントンにいたため、恐らくL.A.という用語を使いはじめたのは、ヴォーであったと考えられる。実際、この言葉は当初オルムステッドはあまり好んでいなかったようである。彼は1865年のヴォーあての書簡の中で次のように述べている。「私はいつも、L.A.という情ない用語に悩まされている。ランドスケープは良い言葉ではない。建築もしかり、そのコンビネーションも悪い。

—— ガーデニングはもっと悪い。(中略)この新しい芸術を発展させようとするならば、古い名前にこだわってはいけな

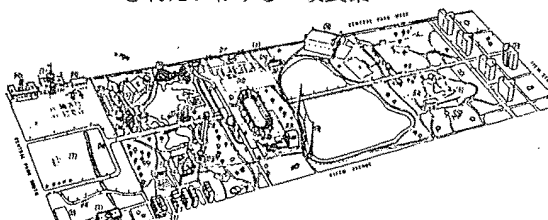
こうして、オルムステッドは様々の名称について検討を加えたが満足を得られるものは一つとしてなかった。しかし、セントラル・パークの実績が評価され、全米に都市公園建設運動が拡大するに従い、L.A.という新しい職業領域は急速に確立されていった。²⁶⁾

6. 結びにかえて

1858年にセントラル・パークの建設が始まってから約130年を経過した。この間、セントラル・パークは、新古典主義の攻勢、スポーツ・レクリエーションの展開、機能を重視した公園施設の建設、パンダリズムによる犯罪の温床化等、田園景観をおびやかす様々の波に遭遇してきた。図-14は、1900年以降、セントラル・パークへの建設が提案されたものを、図上におとしてみたものである。もし、これらのものが、建設されていたとしたら、19世紀アメリカの偉大なる創造物であるセントラル・パークは跡形もなくなっていたであろう。

筆者は、本稿を終えるにあたって、ここに公園というものの本質があると考え。都市は多くの人々が住む場であるが由に、様々の主張がある。都市は常に新しく、かつ革新的であると同時に、真の文化的遺産を蓄積する場でもある。何を守り、何を変革するかは、時代の思想、市民の意志が決定する。セントラル・パークに関して、ニューヨーク市民は、オルムステッドとヴォーによる“緑の芝生”案に、その帰るべき原点を見出した。情報化が進み、価値観が多様化している今日であるが由に、歴史的研究に基づく視座の確立、及び時代の流れを読みとる力が必要とされていると考える。

図-14 1900年以来セントラル・パークに提案されたいわゆる“改良案”



出所: Elizabeth Barlow Rogers, Rebuilding Central Park, The MIT Press, 1987, P6

<補注>

- 1) 代表的研究としては、Frederick Law Olmsted, Jr. and Theodora Kimball, Forty Years of Landscape Architecture: Central Park, The MIT Press, 1973がある。
- 2) Albert Fein, Frederick Law Olmsted and the American Environmental Tradition, George Braziller, 1972
- 3) Elizabeth Barlow Rogers, Rebuilding Central Park, The MIT Press, 1987
- 4) Henry Hope Reed, Bridges of Central Park, Greensward Foundation, Inc., 1990 等
- 5) 内山正雄, 近代都市公園の発生と展開に関する研究, 造園雑誌40(1), P47-56, 1976
同上, 近代都市公園の発生と展開に関する研究(Ⅱ), 造園雑誌41(4), P16-22, 1978
- 6) 佐藤昌, フレデリック・ロー・オルムステッド, 朝日本造園修景協会, 1980
- 7) ニューヨーク市の初期の公園及び公園建設運動についてはFrederick Law Olmsted, Jr. and Theodora Kimball, op. cit. P14-21を参照。ニューヨーク市で、はじめて公園(the Park)という言葉が使われたのは、1821年、共有のオープンスペースとして使われていたフィールズ(the Fields)が、鉄の柵により囲われ公園としての土地利用形態が整ってからである。アメリカで最初に建設された公園(Public Park)は、コネティカット州ハートフォードのブッシュネル公園(Bushnell Park)である(1853年建設)。しかし、面積は50エーカーと小規模であり、様式上も後世に与えた影響は、セントラル・パークと比べると少ない。
- 8) セントラル・パーク建設運動に参加した知識人グループについては、Albert Fein, op. cit. P8 参照。
- 9) John B. Jackson, American Space, W. W. Norton Company Inc., 1972, P211-213
- 10) Albert Fein は、こうした公園に対する理念の背景には、プロテスタンティズムとフランスの空想的社会主義の影響がみられると述べている。Albert Fein, op. cit. P. 9

- 11) Andrew J. Downing, Ed. by Waugh, Landscape Gardening, New York, 1921, P380-387
- 12) Norman T. Newton, Design on the Land, The Belknap Press of Harvard University Press, 1971, P267-269
- 13) Frederick Law Olmsted, Jr. and Theodora Kimball, op. cit. P. 30
- 14) オルムステッドが、セントラル・パークの監督官として選ばれたより詳しい事情については、Laura Wood Roper, A Biography of Frederick Law Olmsted, Baltimore & London, 1973, P124-134 参照。
- 15) Frederick Law Olmsted, Jr. and Theodora Kimball, op. cit. P214-233
- 16) Frederick Law Olmsted, Jr. and Theodora Kimball, op. cit., P233-235
- 17) Frederick Law Olmsted, Jr. and Theodora Kimball, op. cit., P51-52
- 18) Charles Capen McLaughlin, The Papers of Frederick Law Olmsted Vol III, The Johns Hopkins University Press, 1983, P206-211
- 19) Elizabeth Barlow Rogers, Rebuilding Central Park, op. cit.
- 20) ルイス・マンフォードは、歩車分離によるすぐれた都市計画の先例は、古くは中性の都市ヴェニスにあると述べている。また、近代都市計画家として、最初に歩車分離を実施に移したのは、オルムステッドとヴォーであり、セントラル・パークの優れた計画は、後のラドバーク計画に大きな影響を与えたと述べている。
Lewis Mumford, The Lewis Mumford Reader, Ed. by Donald L. Miller, New York 1986, P201-206
- 21) Frederick Law Olmsted, Walks and Talks of an American Farmer in England, London, 1852, P78-82
- 22) Charles Capen McLaughlin ed, in Chief, The Papers of Frederick Law Olmsted, op. cit., P121-122
- 23) Charles Capen McLaughlin ed, in Chief, op. cit., P94-101, P152-153
- 24) Lewis L. Lloyd, Public Space-Colonel George E. Waring Jr., and the Sanitation Movement, Harvard University, 1975, P140-155
- 25) Frederick Law Olmsted Jr. and Theodora Kimball, op. cit., P74
- 26) Mikiko Ishikawa, The Origin of the New Profession of Landscape Architecture in Frederick Law Olmsted, Harvard University, 1976